様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２０日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５００５９０
研究課題名（和文）　体育教育における民族スポーツの教材化と学習プログラムの開発

研究課題名（英文）　The Development of teaching materials and programs of ethnic sports in physical education

研究代表者
石井　隆憲　（ISHII　TAKANORI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：70184463

研究成果の概要（和文）：この報告は、ミャンマーにおける伝統スポーツ「チンロン」を学習教材として使用するための方法について検討したものである。この報告の具体的な研究結果については、拙著『チンロンの神髄』に示した。
研究の方法としては、次の３つのアプローチをおこなった。第１のアプローチは私自身がミャンマーのチンロンを参与観察する。第２のアプローチは、外国人が利用可能な学習教材を作成した。第３のアプローチは、チンロンの指導方法を検討することである。
その結果として、以下のような結論を得た。民族スポーツを学習教材として使用するためには、文化の核となる部分を翻訳しないことが重要である。この結論はチンロンの場合にも当てはまるものである。

研究成果の概要（英文）：In this report a teaching method using Myanmar’s traditional sport "Chinlone" as a teaching material will be examined.
This method is supported by research described in my book "The Essence of the Chinlone in Myanmar".
The following three approaches were used in the research. The 1st approach, participant observation of Chinlone was made, taking an inside view of the sport in Myanmar. In the 2nd approach, I made teaching materials of Chinlone available to foreigners. As the 3rd approach, the teaching method of Chinlone was examined and these approaches led to the following conclusion.
In order to use an ethnic sport as a teaching material, it is important not to translate the core part of its culture. This is the same conclusion as to the case of Chinlone.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ学科・スポーツ学科
キーワード：民族スポーツ、チンロン、ミャンマー、学習教材、学習プログラム、

１．研究開始当初の背景

本研究の前提として、報告者は本務校において 2006 年度からミャンマーの民族スポーツの一つである「チンロン」を、教養科目の体育授業に導入した。授業で取り上げたチンロンは、6 人が円陣を組んで、協力し合いながら、籐で作られたボールをさまざまな技を駆使しながら蹴り続けていく「ワインチン」と呼ばれる形式である。この授業の展開は試行錯誤の連続ではあったが、単なる技術指導に陥らないことを目指してきた。そのため授業においては、当該社会の文化や人々の考え方を伝え、またチンロンのプレイと関連するビルマ語表現などを同時に教えたり、現地での指導を再現し、全てビルマ語によって授業を展開するという試みをおこなった。この結果、学生たちは異文化を感じ、チンロンに対して興味を持つようになったという手応えを感じるようになってきた。

このような試みの背景には、次のような事情があげられる。日本文化人類学会の学会誌『文化人類学』では大学と地域との連携で文化人類学的活動の教育実践について特集が組まれ（「〈特集〉大学-地域連携時代の文化人類学」『文化人類学』72-2, 2007）、また日本体育学会スポーツ人類学専門分科会のシンポジウムなどでは、大学教育におけるスポーツ人類学の授業展開や民族スポーツの教材化などについて取り上げられるようになった（2007～2009 年の学会大会）。こうした研究成果を教育現場に還元していこうとするアカデミズムの動きは、この数年、とくに活発化しており、その重要性が意識されるようになってきたことを物語っているのである。

しかしながら、このような議論は、まだその途についたばかりであり、十分な検討がなされていないのが現状である。とくにこれまでの議論では、経験を通して如何に運動技術を伝えていくのか、という点に焦点があてられ、文化的観点に立った身体教育や、その行為を通して作り上げられる認識といったものについては、まったく注意がむけられてこなかったのである。先述したように民族スポーツをおこなうことは、その認識を作り上げていく行為でもある。つまり、その行為の過程で、実は当該社会の文化的側面が組み込まれていくことが重要であり、このことによって、民族スポーツを通した文化認識の形成がなされていくはずである。

したがって、異文化教育を融合させた民族スポーツの教材化ならびに学習プログラムの開発は、異文化理解や多文化共生の教育をも補完するような役割を持ちながら身体教育に寄与するものとなる。さらにこうした学習プログラムは、体育実技だけではなく、スポーツ人類学やスポーツ文化論、あるいは文化人類学といった授業に導入可能なものであり、これまでにない授業の展開の可能性を含んでいる。

２．研究の目的

本研究は、これまでのスポーツ人類学の知見に基づき、民族スポーツの一つであるミャンマーのチンロンを具体的な研究対象として、その背景にある文化をクロスオーバーさせながら大学の授業で利用可能な学習教材とそれを学習するためのプログラムの開発とを目的とする。

３．研究の方法

本研究は 3 年計画で行われた。研究の手順としては、次のように進められた。

最初に、ミャンマー国内において、チンロンが実際にどのように指導されているのかを調査することであった。チンロンの指導の方法は、講習会などが実施され、一定の規格化された方法が伝達されているわけではないことから、指導者によって指導に対する教授法は異なっていると考えられたからである。そのため、複数の指導者の指導方法をまずは記録することが重要であると判断した。また、調査者自らがチンロンの指導を受けながらの参与観察を行うという方法を導入した。

これらの調査によって得られた指導の方法を整理して、暫定的に技術指導書を作成する。作成された指導書を基にして、再度、チンロン指導者たちに技術指導の方法を確認するとともに、技術書の修正点についても意見交換を行う。さらに、チンロンの中で使われるテクニカルタームについて、日本語に翻訳するにあたって、ビルマ語が持つフレームワークと違いがないようにするために、指導者たちとの意見交換を行う中で、最終的な日本語を確定する。

修正された技術指導書に文化的な解説を加えていくことで、パイロット版となる技術書を作成する。

次に、ミャンマーからチンロン選手・指導者を 3 名招聘し、言葉が通じない日本でチンロンの指導をどのように行うのかを観察し、そこで行われている方法を参考とする。また、チンロンの技術を撮影し、技術指導書をフォローするような映像資料を作成する。

最後にチンロンを学習していくためのプログラムを作成し、それを技術指導書と関連付けることで、学習教材（技術指導書、映像による資料）と学習プログラムの 2 点を完成させる。

４．研究成果

最初にミャンマーで行われている技の指導方法について整理する。次にこの方法を基にして開発された学習教材について説明する。最後に学習プログラムを作成するにあたっての要点を示しながら、チンロンにおける具体例を示す。

（１）一般化される指導の方法

前述したようにチンロンは、その指導方法が確定したものではないため、指導に際して大きな違いが見られるものと思われていた。しかし、調査を開始する中で、すべての指導者が同じような指導方法を用いて指導していることを確認することができた。この背景には、競技形式で行われるチンロンでは、いわゆる規定演技のように競技で使う技が提示されて、それを実演することで得点となるが、それは審判員が技として認定しなければならない。審判員は、ボールの入ってくる方向に対して、選手が決められた形で動きながらボールを蹴り、そのボールの出ていく方向によって技が完成したと認定している。つまり、技術習得にあたっては、技として認定される動き方を身につけていく必要があるわけで、そのためには、型練習が非常に重要な意味を持つことになる。したがって、練習の方法は、技が認定されるように、その動きを身につけるためのものとなるため、自ずとほぼ同じような練習方法がとられていたわけである。

次に、指導の方法について、どのように行われているのかについて述べる。まず、ここでは技の一つひとつの練習方法を記述するだけの紙数がないので、技の練習に共通する練習の方法を示すことにしたい。

技の習得に際しては、次のような７つのステップを踏んでいる。

① 指導者が動きの手本を見せる。
② 指導者が動きについて言葉で説明する。
③ 動きを学習するための方法をとして動きの「型」を指導者が示す。
④ 学習者は動きの「型」の練習をおこなう。
⑤ 指導者がボールを投げ入れ、それを学習者が蹴る練習をおこなう。
⑥ 学習者自身がボールを投げて、それを連続して蹴ることができる練習をおこなう。
⑦ ワインチンにおいて実際に技を使ってみる。

このような手順を踏んですべての技を身につけている。

（２）学習教材の作成と利用方法

上記の調査結果に基づき、指導者がいなくても独習可能な学習教材を作成する。そこで指導者が示すような実演を映像で表現するためにDVDに上述の③と⑤の動きを収録するとともに、それぞれの技について、身体の動かし方のポイントを言語化する。それを次のような手順で練習をせる。

① DVD を見ながら、身体の動かし方を頭の中に入れる。動き方の配列を言葉によっても確認する。
② DVD を見た後、あるいは見ながら実際に学習者自身は自分の身体を動かし、動きの型を身体に覚え込ませる。このときにボールを使わずに「型練習」をする。
③ ほんの少し動き方を覚えたところで自分の動きを撮影して、DVD の動きとの違いを確認する。特に頭、首、胸、手、肩、腰、立ち足、蹴り足に注意をする。
④ 動き方を微修正しながら、型練習を繰り返しおこなう。型練習は徐々に回数を増やしていく。また、利き足だけではなく、左右どちらの足でも蹴ることができるように型練習をおこなう。
⑤ 動き方が定着したところで、学習者自身がボールを投げ入れて実際に蹴ってみる。ここでは蹴ることに重点を置くのではなく、形の維持を優先させる。もしこの時にボールを投げ入れてくれる人がいるのであれば、蹴り方のフォームも確認してもらう。
⑥ 学習者自身がボールを投げ入れて連続してボールを蹴る練習をする。このときにボールの当たり具合を意識して、ボールをコントロールできるようにする。
⑦ 実際にワインチンの場面で技を使って蹴ってみる。

上記のような方法によって学習可能な教材を試作した。なお、学習教材の試作版として、『チンロンの神髄－ミャンマー伝統の球技』を刊行した。

（３）学習プログラムの要点

ミャンマーでは技の学習について、その学習順番をミャンマーチンロン連盟が競技を実施するにあたって分類している技のグルーピングに基づいて実施している。そのグルーピングは、大きく４つに分類されているが、それらのグループ内には、技の類似性といったものを確認することはできない。また、ミャンマー国内で確認できることであるが、小さい頃から専門的にトレーニングをしなければ、チンロンの競技大会に出場することは難しく、一定の年齢以降からチンロンをはじめた人びとは蹴ることができそうな技だけを学習するのが一般的である。こうした状況を見ると、大学の授業内で学習する場合も、ミャンマーでチンロンを楽しみとして行っている人びとと同じような意味での技術習得が望ましいと考えられる。このような考え方に立って、最も効率の良い学習プログラムを構築する必要がある。そこで考えられたのが、動きの類似性（類似する運動形態）に注目して、それらを一つのグループとして学習させるというものである。ただし、技の学習

をはじめる前に基礎技術６種類（チェービャー：つま先、チェークィン：インサイド、ドゥ：膝、パワー：足底、パナゥ：踵、パミャ：アウトサイド）を最初に練習し身につける必要がある。

以下に初心者がチンロンを学習するにあたって、効率的な動きの類似性に基づく分類を提示する。

① タッチェービャーのグループ
タッチェービャー、ワィチェービャー、チョーピャンチェービャー、タッチェークィン、

② マハドゥのグループ
マハドゥ、マハジー

③ ニョンドゥのグループ
ニョンドゥ、インレーパワー、インレーパナゥ、マハニョン

④ デパワーのグループ
デパワー、デパナゥ、ピーラーパワー、タンピーラーパワー、ヒーラーパナゥ

⑤ パッドゥのグループ
パッドゥ、パッニョン、インレーパッパワー、インレーパッパナゥ

⑥ ワィジーのグループ
ワィチェークィン、ワィジー、ワィドゥ、タッドゥ、チョーピャンドゥ、チョーピャンチェークィン

⑦ サロェジーのグループ
サロェジー、ザゥンサロェ、ピーラーサロェ、パッサロェ

⑧ シャテイティンのグループ
シャテイティン、アピャウシャテイティン、カバニョンチェービャー

⑨ ミンスィパナゥのグループ
ミンスィパナゥ、ミンズィンパナゥ、チョーピャンパナゥ、アピャウバージャーパナゥ、バージャーパナゥ

以上が動き方の類似を基にした分類となる。この分類による学習によって、従来の技術学習よりも早く技が身につくことが確認された。技術を優先させるのは、文化の理解と技術の理解が並列的に進まないからであり、また、技術を身につけることでチンロンの楽しさを知り、分あて機関心も高まるからである。

そのため初心者が動きの類似性を基にして学習する期間においては、チンロンの中に含まれる文化的な焦点（チンロンの支柱となるような文化的な考え方）を翻訳せずに、そのまま教えていくことの方が効果的であるということである。ミャンマーから招聘したチンロン選手や指導者が、日本人にチンロンを指導する場面を観察すると、言葉ではなく、動き方の重要性について見本を見せながら繰り返し教えていた。こうした指導の方法は、もちろん言葉の問題もあるが、ミャンマー国内においても確認することができる。ミャンマーでのチンロン指導場面では、最初の学習場面では特に文化的なことを説明することはなく、とにかく指導者の方法を模倣させる。その後、ある程度チンロンができるようになってきたところで、チンロンの文化的な側面について解説を加えるということが行われている。また、これまでの調査によると、外国人に対しては、ビルマ語がある程度理解できるレベルになければ、チンロンがいくら上達したとしても、文化的な解説はほとんど行われない傾向にある。この背景には、文化的な違いを一から説明しながらチンロンの中にみられる文化的行為を説明することが、非常に困難であり、仮に説明できたとしても、それを外国人が十分に理解できるのかは不明であることから起こっているものである。こうしたことを考えていくと、初期の学習期間において、すべての情報を翻訳して学習者に伝えていくことは、それほど重要ではないことがわかる。ただし、異文化としてのチンロンが、チンロンらしくあるためには、チンロンらしくしている文化的な焦点を外すわけにはいかなくなる。そこで、この文化的な焦点を翻訳することなく、学習者に伝えていくことで、異文化を感じさせながら学習させ、最終的には学習者の積極的な解釈によって意味づけをさせる方が効果的であるという結論に達した。

こうした問題について、一つ具体例を挙げてみよう。チンロンを蹴るときの手の形は親指、人差し指、中指の腹を合わせるようにしながら軽く握るような形となるが、これはミャンマーでは美しい手の形と理解される。この握り方が美しいとされる背景には、ミャンマーの伝統舞踊の手の動きが関係している。したがって、伝統舞踊に見られる美のあり方が、ミャンマーのチンロンの中にも取り入れられる方が、より美しいスタイルとなるわけである。しかし、ミャンマーの伝統舞踊に見られる美のあり方を私たち外国人が理解できるのかといえば、それほど簡単な事ではない。それならば、最初から「こうした手の形でチンロンはおこなわれ、それが美しいと考えられている」というひとことを添えて、あとは学習者が技術習得と一緒に手の形を覚えるように指導していき、いつの日か学習者自身がこうしたことに興味がわいたときに、独自にその意味を探求させる方が異文化を深く理解することに繋がると考えられる。

したがって、チンロンを学ぶ初期の段階にあっては、文化的焦点をあえて翻訳する必要はなく、それらを含めて一つのパッケージとして学習させることが効果的であるというわけである。

以上が、本研究によって開発された学習教材とプログラムである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 石井隆憲、三沢伸生、トルコ･イスタンブルにおける合気道の伝播と現状－その覚書－、『アジア文化研究所研究年報』第47号、2013.3、pp.23-30、査読無
② 石井隆憲、三沢伸生、近代スポーツ・メディアとアジア民族に関する覚書－民族スポーツとして格闘技の検証に向けて－、『アジア文化研究所研究年報』第46号、2012.3、pp.1-4、査読無
③ 石井隆憲、民族スポーツ実践のための教育システムの構築－ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」の教材化を中心に、『ライフデザイン学研究』第7号、2012.3、pp.369-374、査読無
④ 石井隆憲、駒井義昭、三沢伸生、在日トルコ（タタール）系イスラーム教徒に関連する視覚史料のデーターベース化事業、『アジア文化研究所研究年報』第45号、2011.3、pp.13-22、査読無

〔学会発表〕（計７件）
① 石井隆憲、スポーツ人類学における当事者性とは何か－客観的データは存在するのか－、日本スポーツ人類学会、2013.3.25、金沢大学サテライト・プラザ
② 石井隆憲、当事者性の身体研究（特別講演）、比較舞踊学会、2012.12.8、早稲田大学
③ 石井隆憲、ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」における学習プログラムの構築－ローカル・ノレッジを切り離した実践的行為に基づく異文化移植－、日本体育学会、2012.8.24、東海大学
④ 石井隆憲、ベトナムにおける鈴長空手の形成、日本スポーツ人類学会（月例研究例会）、2012.7.15、大学コンソーシアム京都・立命館大学サテライト教室
⑤ 石井隆憲、ベトナムにおける空手の伝播と変容－当事者たちの語りから－、日本武道学会東京支部例会・講演会、2012.7.14、講道館
⑥ 石井隆憲、当事者としてのスポーツ人類学研究－誰がミャンマーのチンロン世界を翻訳するのか－、日本スポーツ人類学会、2012.3.24、天理大学
⑦ 石井隆憲、ミャンマー「チンロン」の教材化に関する実践研究、日本体育学会、2011.9.27、鹿屋体育大学

〔図書〕（計２件）
① 石井隆憲、『チンロンの神髄－ミャンマー伝統の球技』、明和出版、2012、72頁（2時間のDVD付き）
② 石井隆憲、田里千代編著、『「知る」スポーツ事始め』、明和出版、2010、243頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
石井　隆憲（ISHII TAKANORI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：70184463

(2)研究分担者（0）

(3)連携研究者（0）